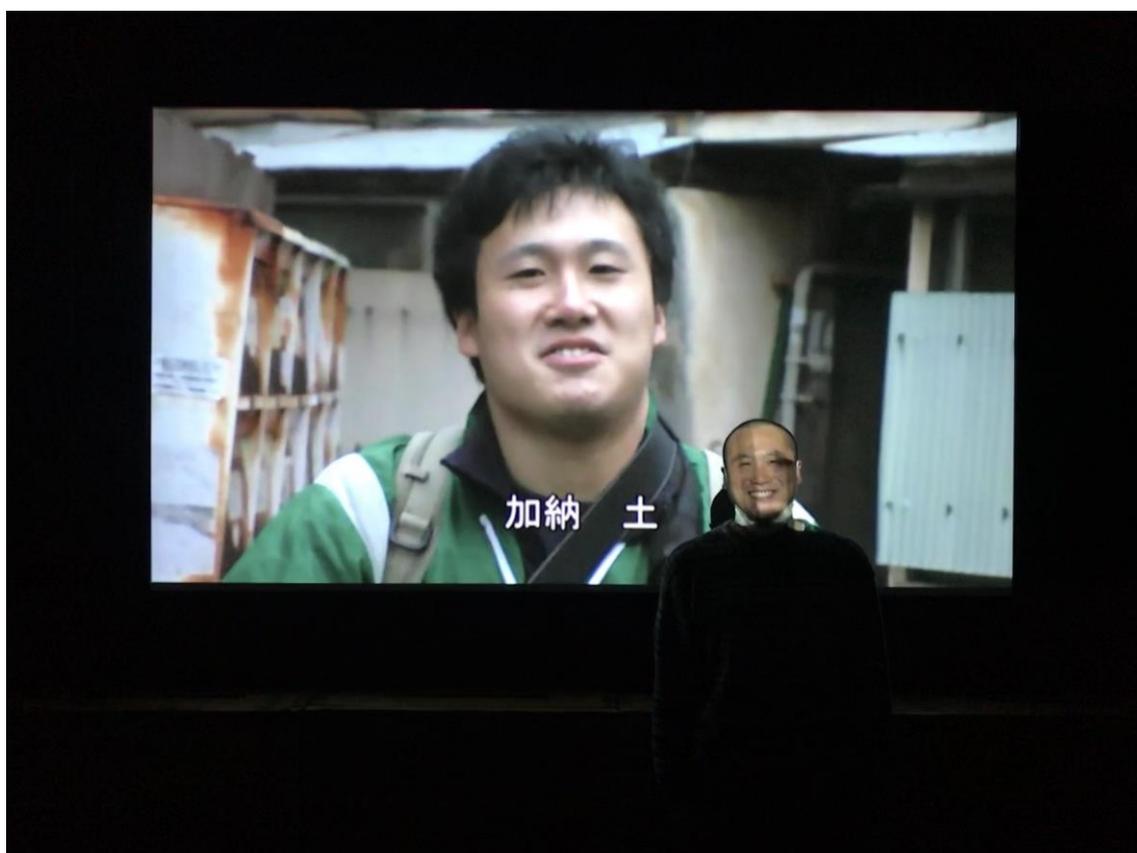


KANGEKI 間隙 vol. 17 沈没ハウスと沈没家族

トーク：加納土（『沈没家族』監督）× 小原治（KANGEKI 主宰）



KANGEKI



2022年2月11日（金・祝）Space&Cafe ポレポレにて

テキスト・構成：小原治

小原：なぜ今回この間隙で『沈没家族』を上映することになったかという、今年の1月10日、今日からちょうど一か月前ですね、その日の土君のツイッターで沈没ハウスが取り壊しになることを僕が知って、すぐに彼に電話をして、なんかやれたらいいよねって話をしながら今回の上映会を一緒に企画したんですけど、土君は沈没ハウスが取り壊しになることについてどんな気持ち？

加納：シンプルに寂しいってのがまずありますね。自分が2歳半くらいから小学校2年の終わりまで住んでいた家だし、思い出もたくさん詰まっているし……。ポレポレとかも大きくなってからよく行くけど、東中野に来た時にずっと沈没ハウスはすぐのところにあったのがなんか安心というか、僕と東中野をつなげる感覚だったからそういう意味でも大きいですね。勝手にランドマークみたいな場所だった。あと、自分はこうやって映画を作って沈没家族のことを語っているけど、先月のさよならパーティーで改めて沈没家族のなんつうか豊かさみたいなものを感じて……。場所だったり、生活だったり、コミュニティだったり、生きがいだったり、なんて言えばいいかわからんけど、その分厚さみたいなものを改めて思って、だからこそ僕にとってだけでなく、大きなものがなくなるんだなという感じですね。歴史的建造物みたいな？

小原：今回は『沈没家族』の卒業制作版を上映するんですけど、劇場版との違いを監督自身どうとらえています？

加納：沈没家族というものが今の時代にとって面白いと思ってもらえるなら、そこからじゃあもっと多くの人に届けられるように工夫しようと思って劇場版を作りました。そこで育った僕がどんなことを感じたかもナレーションなどで結構語ってるんですよね。それに対して、卒業制作版はあんまわかりやすく語ってる感じはなくて、もっとおとな達に会いたい！とか、沈没ハウスに入りたい！とか、当時のノート読みたい！とか僕のモチベーション

ではっきり作られてるから、劇場版よりもっと生っぽい記録って感じがします。今回はその卒業版を上映したいなと思ったんです。



—『沈没家族 卒業制作版』上映終了—

加納：映画、観て下さってどうもありがとうございました。僕もスクリーンで観るのは久しぶりだったんですけど、編集とか、テロップとか、わ！懐かしい！って感じで。卒業制作版もめっちゃいいなって思いました。僕も好きです。

小原：僕はこれまで『沈没家族』の上映は劇場版含め何度も立ち会ってきましたが、やはり今回は特殊な体験でした。沈没ハウスが取り壊しになるという現実を通して卒業制作版を改めて観るとより染み込んでくる側面があったし、ここから歩いて8分のところに沈没ハウスがあるという立体感覚の中に今日ならではの映画体験が作り出されていた気がします。

ではスライドショーを始めましょう。



加納：沈没ハウスのリビングでいつも書初め大会をやっている。外から見ても窓にこんなにびっしり書道が貼ってあって。なかなか怪しい空間だったんです。当時、役所かな？行政の人が時代が時代だけにオウムの施設かなにかだと思っただけで、不特定多数の大人が入り出しているし、当時シェアハウスという言葉もまだなかった時代ですからね。

小原：一番右、なんて書いてんの？喧嘩…？

加納：“喧嘩上等” 加納穂子（笑）。

小原：（笑）。映画の中では穂子さんは“人間解放”って書いてましたよね。穂子さんはその時々で様々な活動をしながらも一貫しているテーマが人間解放なんだろうなって思う。この状況自体、個人の内面が進むように解放されてるし。

加納：人間解放は穂子さんの中で一貫してあって。沈没にいたときもそうだし、映画撮って思ったのは、八丈でもやってることは基本変わらないなって思いました。



加納：手前がめぐで、奥が僕ですね。動物写真みたいな躍動感（笑）。

小原：後ろから追いかけてくる子が十何年後にカメラを持って自分のインタビューを撮りに来るって思ってもみなかっただろうね。今回の上映会を企画する際に真っ先に思い出したのがめぐさんの台詞でした。「家の中でも親以外に逃げる場所が沢山ある」というあの言葉には沈没ハウスの建築的構造と沈没家族のエッセンスが重なる視点があって、なるほど！と思った。

加納：これは一階のリビングなんですけど、二階と三階にそれぞれの母子の部屋があって。シェアハウスだからといって他人と絶対に関わらないといけないわけじゃなくて、しんどい時にはそれぞれの部屋に戻ってもいい。めぐも自分の部屋とかリビングで母のしのぶさんに怒られても、別の部屋に行くとイノウエくんには褒めてもらえたり。あと、リビングの中でも大人同士で交流してくぜ！って人たちと、子供たちとじっくり遊びたいって人たちとかもいて。それぞれがいて、色んな場があった。



加納：これもリビング。左でカメラを向けているのが穂子さん。沈没ハウスの加納母子の部屋に暗室みたいなスペースもあって、彼女はそれぐらい写真は好きだった。

小原：沈没家族の記録がこうやって写真とか当時の育児ノートとかに残ってるって、ドキュメンタリーを作るうえでほんとに豊かな力になってますね。

加納：本当にそれがなかったら成立しなかった。みんなの文章とか写真もだけど、熱量が凄くて。僕が間隙に寄せた文章にも書いたけど、映画の中では表しきれない面がそこにはいっぱいあって。それがちゃんと残ってるって超感謝。



加納：僕の中ではこれが結構当たり前の光景だったりもして。大家族とかならこういうのはあるのかもしれないけど、そこに血の繋がりのない人たちが集まってわらわらやってるってのが不思議な感じでしたね。食事マナーも朝教えられたのと昼教えられるのとで違ったり（笑）。茶碗もつのどっち？とか。でもな結果的に上手く順応し

てやってきましたね。懐かしいなー。

あと写真には残ってないんですけど、しのぶさんがめぐと別にもう1人の子供を産んだ時、沈没ハウスのトイレで産んで。その時、大人たちが胎盤食ってたんですよ。胎盤食ってやつですね。生姜醤油で、うまいうまいてすっごい食べて。僕の中でずっとトラウマなんです。妖怪みたいな人達だなって（笑）。もちろん大人の中にも引いてた人はいたと思うんですけど（笑）。



加納：これは山くんです。場所は鎌倉ですね。山くんと僕が週末会うのは決まっていたけど、山くんは主に写真を撮りたいという理由で穂子さんとも会ってて。

小原：じゃあこの写真を撮ってるのが穂子さんか。ということは山くんのカメラにはこっちにカメラを向けている穂子さんが映ってるってことか。

加納：なかなか青春っぽいことふたりでしてますよね。

小原：映画にも出てきたけど、山くんの写真って素晴らしいよね。ポレポレ東中野で延長上映が決まった時のチラシにも山くんが撮った写真を使わせてもらったけど、あの写真で映画の深い場所に触れるようなエモーションがチラシにも載った感じが確かにあった。



加納：この写真は劇場版では使っているんですけど、卒業制作版では使ってなくて。穂子さんは山くんと対話が無理だと。コミュニケーションをとって何かを決めるってことがどうしても無理だから、話して埒が明かないからボクシングしようぜってホコさんの方から言ったらいいです。山くんに手紙を書いて、沈没ハウスの屋上で、ギャラリーもいて。

小原：本来は内に閉じている2人の関係性のある種見世物にすることでそこに他人を巻き込んでいくというか。それって凄く現代的な感覚だね。やっぱホコさんの感覚って早かったなって思う。こうした状況を受け入れるしかなかった山くんの胸の内も思うところはあるけど。



加納：これも山くん。おぶってるのがめぐで手前が僕ですね。沈没の中で笑ってる山くんが僕の記憶のなかには

全然なかったんで、こういう瞬間もあったんだなって。いい写真ですね。

小原：君と山くんは血の繋がりはあるけど、これ見ると、山くんとめぐさんの関係も面白いなって思う。大人と遊ぶのって純粋に楽しいじゃないですか。むしろ大人の方も人の子供となら純粋に楽しく遊べるってこともあるのかもしれない。他人同士だからこそ親としての役割ではなく自分も純粋に楽しむことが目的になるというか。僕の勝手な解釈でしかないんだけど、そういう関係性が沈没ハウスの中では実践されていたんだらうなってことを、この一枚を見て改めて思いました。

加納：確かに。めぐも自分の母親と遊ぶときは何かを意識するかもしれないけど、外から子どもと遊びたそうな大人が来たら、とにかく何も考えずに遊ぶだけっていう関係性はよかった。実際、子どもと遊びたいっていう目的で来てた大人もいっぱいいたから。逆に、子供の方が「ちょっと今そういう気分じゃない」って時もあった。大人がすっげえ遊びたくても子供の方が疲れて気分がのってない時とか。僕もそういう気分があったし（笑）。



加納：これも好きな写真。ザ・沈没って感じで。手前で寝てる人は住人じゃないんだけど、多分僕の想像ではフラッと沈没ハウスに来て、泊まるつもりだったか分からんけど、もう寝るって感じで。真ん中にいるめぐはひとり遊びも好きで、誰かのパソコンで遊んでいて、多分穂子さんらが台所で色々やってて。沈没にいたいろんな人

にとつての原風景ってあるかもだけど、僕にとってはこの感じがデフォルトな感じであああってなる。

映画の中でもちょっと言ってたけど、小学生のとき僕はこんなカオスな生活に染まっちゃダメだって思っていて。誰に言われなくても歯磨きやったり、ちゃんと早く寝たり、宿題も毎日帰ってきてすぐにやったり、かなりの優等生だった。病的なまでに。それがなかなか辛かったですね。



加納：屋上から一番近い部屋に僕と穂子さんは住んでいたんですけど、屋上に行くにはみんなその部屋を通らないといけないからガヤガヤとしてた記憶がなんとなくある。

小原：沈没家族にとって屋上は重要ですよ。

加納：重要ですね。映画の撮影では行けなかったんです。

小原：沈没家族も一つ屋根の下にいたらそれぞれの役割とか、それぞれに居心地のいい場所とかあったと思うけど、そういったものが一つ空の下だとフラットになるといふか。他人同士が平等に存在するという状況が自分の暮らしの中にあるってことを認識するのがとても重要で、そんな沈没家族のエッセンスが沈没ハウスの屋上という

空間に表れている気がします。

加納：部屋の住人も、外から遊びに来た人も、みんな屋上に集まると沈没ハウス自体もそうだけど、特にフラットな関係になるっていうのはホントその通り。夏とかここで布団敷いて星空を見たりとかいろいろ思い出のある場所で。先月のさよならパーティーで20年ぶりに入らせてもらいました。



小原：沈没家族って共同保育人を穂子さんが募集してできたものだけど、それって大人が子供を助けるとかじゃなく、保育することで大人の側も暮らしが滑らかになるというか、そうした価値の循環が沈没家族の実験だったと思うし、そんなことをこののんびりした写真一枚に感じます。いい写真。

加納：だめ連っていう大きな集まりがあって。セックスできないとか、就職できないとか、結婚できないとか、そういう社会の中でいわゆるだめとされてることを別にだめでもいいじゃん、だめを一人でこじらせるんじゃないか、それを人と共有したり笑い飛ばしたりしていけばもう少し楽になれるんじゃないのかっていう。そうしただめ連の人たちが90年代後半の主に中央線のいろんなところで集まって、交流も生まれて。だめ連に穂子さんが出会ったのが結構でかくて。で、だめ連界隈にいた人たちに当時、比較的時間の余裕ある人も多かったと思うんですよ。映画の中でもペベさんが言ってたけど、「もう子育てなんてできないかもしれませんよ」って殺し文句

で沈没に誘われたらしいけど、彼らにとって子供と遊んだ、触れ合った経験はすげー大きかったと思う。もちろん僕と穂子さんの2人でも話したけど、彼らがいなくて2人だけだったら、と考えると出会えたこともそこに飛び込んでくれたこともとても大きかったですね。

—スライドショー終了—

このあと沈没ハウスを一緒に見に行く参加者を募ったところ、客席にいたほとんどの方が手をあげてくれました。そして一行は二月の寒空の下、ポレポレ坐から沈没ハウスを目指してぞろぞろ歩き出します。引率係の加納土監督が道中でも当時の思い出を語ったりしながらわたしたちを楽しませてくれました。



しかし、沈没ハウスがこの日まで現存しているのかどうかはまだ分からず、行ってみたら更地になっていた…なんて結末も今日ならではの忘れがたい思い出になればいいと思っていたのですが、一步一步近づくとやはり期待に胸が膨らんでいきます。そして最後の曲がり角をまがったところでわたしたちの目に飛び込んできたのは、闇夜に異様なオーラを放つ無人の沈没ハウスでした。さっきまで映画の中にあった建物が目の前にどーんと現れ、虚実がねじれたようなスペクタクルにも感動しました。



今回の間隙は、沈没ハウスの観点から『沈没家族』をとらえなおす試みでした。今は観る機会のほとんどない卒業制作版を上映し、沈没ハウスの当時の写真をスライドショーで見て、最後はみんなで沈没ハウスを見に行くという盛沢山の上映会でしたが、ポレポレ坐から歩いて着くまでの距離感や、そこに流れている風景なども今回の鑑賞体験の奥行きとなれば幸いです。

間隙初の課外活動は、こうやってお客さんと一緒に映画の中に入っていきようなライブ感が生まれて最高でした。今回参加して下さったみなさん、本当にありがとうございました！

小原治（KANGEKI 主宰 ポレポレ東中野スタッフ）